

國學院大學學術情報リポジトリ

出版物紹介

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000585

出版物紹介

櫻井義秀編著『宗教とウェルビーイング—しあわせの宗教社会学』

(北海道大学出版会、2019年3月)

内容紹介

日本社会は歴史上初めて持続的な人口縮小期を迎え、社会の維持・発展を自明のものとした救済論や現状認識は通用しない時代が到来した。転換期にある日本社会において現代宗教の課題は何か、人々の求めに応じる宗教実践のあり方とはいかなるものか。また、つながりの希薄化や個人化傾向に抗う社会的絆再編が求められる中で、現代宗教はソーシャル・キャピタルやしあわせの基盤づくりにいかに寄与しうるのか。以上の問題意識から第Ⅰ部で宗教とウェルビーイング研究の理論的検討が行われ、第Ⅱ部においてアジア・西ヨーロッパ・日本の地域間比較となる宗教意識・行為の主観的幸福感の計量分析、第Ⅲ部では主観的幸福感の局面として女性・高齢者・過疎地域・移民の事例分析から宗教的信仰や儀礼、継承、教団活動に媒介された宗教的幸福感が考察される。



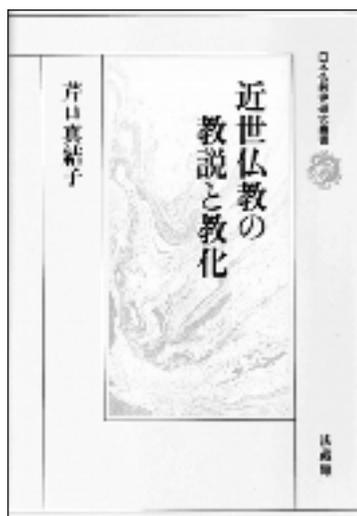
芹口真結子『近世仏教の教説と教化』

(日本仏教史研究叢書、法藏館、2019年6月)

内容紹介

近世仏教史についての研究は、思想史研究や政治史研究、地域社会史研究など様々な観点から行われており、近年は書物研究の成果を踏まえた宗教知や信仰に関する研究も盛んである。しかしながら、こうした実証的研究は個別の分析に留まっており、それらを総合的に理解しようとする動きは活発ではない。

以上のような問題意識のもと、本書は近世の東本願寺派教団を主な分析対象に据え、その教学論争の展開や教説の拡散過程を通して近世宗教の特質の解明を試みている。教学研究の発展は、経典の解釈の相違に伴う僧侶間の対立や自宗派の優越性の主張による宗派間の論争を引き起こし、幕藩領主がそれに対応する例もあった。また教説は、僧侶や書物によって民衆層にも広く受容されていった。本書は近世日本の社会構造や諸階層の思想の特徴を総合的に捉える上で、このような教化・教説にかかわる諸事象への注目が重要であることを主張する。



天田顕徳『現代修験道の宗教社会学—山岳信仰の聖地「吉野・熊野」の観光化と文化資源化—』

(岩田書院、2019年9月)

内容紹介

本書は、「明治維新以降の大転換期」にある現代の修験道のありようと、変化の諸相を奈良県の吉野と和歌山県の熊野地域をフィールドとして論じたものである。

著者の博士論文に基づく本書は、研究課題として、修験道の「担い手」である「行者」と「講」を提示し、その数や社会的性質の動態に注目しながら、山岳修行の変化や修験者の意識の変容を考察した。また、修験道の文化財化・文化遺産化が進展している状況に、「ツーリズム」という補助線を引くことで、「信仰」が「伝統文化」へと読み替えられている現状を明らかにし、それが地域や行者に与える影響を検討した。そのような分析を通して、本書全体のキーワードでもある「霊山の解放化」のあり方や特徴を析出し、現代修験道という研究対象を宗教社会学の研究史上に位置づけることを試みている。



黒崎浩行『神道文化の現代的役割—地域社会・メディア・災害復興—』

(弘文堂、2019年12月)

内容紹介

産業化、都市化、グローバル化が進んだ現代日本社会においては、地域コミュニティの衰退や、貧困と格差の拡大、自然災害の頻発とその復興などの困難な問題が生じている。

本書は、現代日本社会が抱える問題に対して、宗教がどのような役割を果たすべきかを、多様な当事者の期待や課題認識および、それらをめぐる実践に着目し、検討している。特に、祭りや伝統芸能などの神道文化（神社神道に関する文化）と、その担い手を対象として、当事者への聞き取りや参与観察などの調査をもとに、彼らの具体的な実践のあり方を明らかにした。そのような試みを通して、宗教の持つ社会的統合機能や、究極的関心への説明機能を問いただしている。

なお、本書は「令和元年度國學院大學出版助成（甲）」の交付を受けて刊行されたものである。

